

---

# 空飛ぶペンギン

久我 東吾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空飛ぶペンギン

### 【Nコード】

N0558E

### 【作者名】

久我 東吾

### 【あらすじ】

少年の青春群像みたいなかんじでおおくりします

## 第1話 first diary

いろいろあったと思う。

悲しかったこと、嬉しかったこと、楽しかったこと……。

その結果がこれなのだからしかたない。

すべて明日決まる。

アイツはこのことをうち明けたらどんな顔するんだろ。喜ぶのかな、悲しむのかな、怒るのかなあ……。

いや、いつもみたいに子供の落書きみたいな顔をくしゃくしゃにして笑ってくれると思う、ふふっ。

いかんいかん、つい顔がほころんでしまった。

でも………

明日が待ち遠しいようで、きてほしくない。

心に落ち着けと願うのに、拒んでいる。

楽しみなのに、怖い。

気持ち矛盾だらけだ。

言葉にすると、今、私の心はどんな風に落ち着くんだろ。

不安、期待、憂い、躊躇い………どれも違うよ  
うな気がする。

けど、無理にでも言葉にしなきゃいけないことがあるってことを今  
回始めて知った。

風の知らせにまかせてはダメ。そのほうがゼツタイに後悔する。

結果よりも、それを知れただけでもよかった……

……ってのはウソ。

自分の内面にすら予防線をはっちゃうとは、どうやら私は随分まい  
つてるみたいだ。

そう、期待より不安の方が大きいにきまってる。

もし、アイツの悲しむ顔をみてしまったら……。

怖い、コワイ、こわいこわいこわい……。

もうやめ！

これ以上書くと鬱になっちゃう。

眠ることにします。

2月13日（金）

第1話 first diary (後書き)

初投稿です！拙い所も多々ありますが、まあきが向いたら続きもみてやってください。

## 第2話 c o m m i t s u i c i d e

2月14日(土)

僕は透明人間になりたかった。

そこにいるのに見えない、そこにいるのに触れられない、そこにいるのに気づかれない……………そんな存在に。

でも、それは無理だと知った。それは人間のできる範疇を越えていた……………。

ならば、僕はどうするべきなのだろうか！？

そんな不毛な自問自答に終止符をうつ答えをやっと僕は見いだせたいや、見いだすと言うと少し語弊がある。もつずっと前に、この選択肢は僕の頭の中に存在していたのだから。

でも、僕は躊躇っていた。本能と理性がうまくつりあって、天秤が一方に傾くことはなかった。

両義的感情の葛藤にくるしむだけだった。

それが……………。

薄暗い部屋の中、しめきつたカーテンの隙間から日の光が僅かにはいりこんでくる。それがいやに眩しく感ぜられた。

ふと顔をあげると視界のなかに立ち鏡が目に入った。天井からのびた荒縄を首にかけ、イスにうつろな感じで立っている男がそこには映っていた。

アホみたいだなあ

無論、それは僕である。改めてみる自分は、やはり冴えない平凡な男子高校生の何者でもなかった。むしろ覇気がないぶんより悪い。若さがくすんで見える。

ふうー

つい溜め息がこぼれる。親に申し訳がないという思い。それに瓜生たちにも。

自殺だなんてなあ。

去年の今頃はこんな風ではなかった。

他の男子学生同様意味もなく盛り上がって、学校からの帰り道仲間と一緒に来年こそはなんて言って慰め合い、未兔からもらったハートの上にでかかど「義理」と書かれたチョコにかぶりついていたはずなのに……。

今年はこの味気ないことになるとは

考えたくなくてもつい思考を止められない  
自嘲の念をこめた笑いが顔を歪める。ここ数日でそんな表情もだい  
ぶうまくなつた。

僕はここまでできてはまだ迷っているのだろう。

本当はこんな形で2人と別離をはかりたくなかった。その思いも確  
かだ。でも、馬鹿な僕にはこれ以外の方法なんて思いつかない。ど  
んなに出来の悪い頭を捻つてもなにもでてこなかった。

こんな自分に反吐がでる。

それでも約束だけは守ろう。その思いだけが今僕を突き動かす。

たとえ他人からみたらただの自己保身だろうと、自己陶醉だろうと、  
自己暗示だろうと・・・・・・・・・・

たとえ自分が苦しかりうが、悲しかりうが、痛かりうが、それが大  
好きな人からもたらされるものならば、耐える。そして、自分は絶  
対にその人にそんな思いをさせるんじゃない。

それが男ってやつだ。

僕は今までこの約束をひたすら守ってきたんだ。だから今回もそれ  
にしたがうだけだ。

机の上の写真を見つめる。少し前までの僕らが写っている。最後く  
らいこんな風に笑いながら・・・・・・・・・・



### 第3話 自己紹介 1

もしも自分にとってみじかな位置に、アイドルみたいな彼もしくは彼女がいたらなんて考えたこと一度はないだろうか。

例えば、彼氏彼女の関係じゃなくていい、遠くから憧れているだけでいい、同じ学校に自分の好きなあの芸能人がいてくれるだけで……なんてふうに。

そりゃあ、「実は最近人気の」と友達なんだよねえ。「なんて自慢になるし、同窓会がたのしみにだってなる。僕もそれには賛成だ。サインを売って一儲けしてやろうとも思う。」

しかし、僕、星野千秋を苦しめたのはそんな思春期男子学生の妄想を一回りくらいスケールダウンした現実だった。

それを幸運や奇跡と感激することは僕には出来そうもない。

僕には幼なじみがいる。それも二人も。

福部圭介に宇井野未兎。それが二人の名前。

凡夫な僕にとっての二つのイレギュラー。そしてかけがえのない親友。この二人がもつと「凡」がつく存在だったなら、きつと親友という言葉の頭に大を素直につけられていたと思う。

僕たち高校生にとって、客観的なパーソナリティーを決定するには

優先順位がある。

- 1．容姿
- 2．運動能力
- 3．頭脳

多少の意識の差はあるかもしれないがこの3つはかたい。性格、人柄なんてものは常に後回しだ。そんな僕が生きる世界の価値基準において、二人は明らかに遠い存在だった。

福部圭介は我が高校において有能な広告塔の役割をはたしている。

3つの中の上位2つが抜きん出て良く、彼が所属するサッカー部は昨年インターハイ出場を果たした。彼は一年生ながらそんなチームのポイントゲッターだった。

本当にむかつく事だがこれは真実だ、くそ！

まあ、三番目は僕と同じくらいなので許そうと思う。

宇井野未兎は僕の位置から見ると雲の上にいる……………らしい。

3つの項目すべてにおいて。試験ではつねに片手の中に入る成績の

頭脳。男子平均の僕が、どの競技をとっても勝てない運動能力。

そして、へたなグラビアアイドルが裸足で逃げ出すほどの容姿。

雲上人とはまさにこういう事なのだろう。

学校という枠組みの集団においての有名人。

それが僕の近しい人のいる場所だった。

それを僕は感激するのではなく、悲劇だと呪詛を吐くくらいしかできなかつた……………。

## 第4話 自己紹介 2

大好きな人を苦しめてはいけない。

例えば自分が自分を苦しめようとも……………。

それならば、大好きな人たちにとって「僕」という存在事態がその要因になるならば、いったいどうすればいいのだろうか。

透明になりきることなんて出来ないこの現実で、存在を否定された自分は、いったい……………。

僕たちの関係は近からず遠からずという表現がぴったりなものだった。

漫画のように毎日べったり側にいるわけでもなく、それでも廊下で会えば少し話し込んだりするし、たまにいつしよに帰ったりもする。クリスマスや初詣などのイベントも三人で祝うことが多かった。

しかし、時を重ねるということはそれだけでなにかしらの変化をもたらすらしい。もしくは僕たちも恋愛というものに憧れる年齢になったのかもしれない。

とにかく、仲のいい三人という枠組みもしだいに変容していった。それも形だけはそのままに……………。

中学生の終わり頃のことだっただろうか。僕は自身の周りの環境を

完璧に理解したのは。

僕に対する呼称は年を重ねる毎に変わっていった。

小学校の頃はチキ君。

中一で千秋君

中二、中三で星野。

そして今、高校二年生では福部、もしくは宇井野の知り合いとなっていた。

月が昏間は太陽の光でかすむように、対比物のせいで僕は限りなく薄くなっていった。中学はまだエスカレーター式で知り合いが多い分よかったが、高校では泣きたくなった。

そうなることを予見していた中学生の僕は、結構聡いタイプなのかもしれない。

僕は至ってふつうだ。

鍵かっこがつくくらいに、普通。

女の子が頬を染めてうつむくほど格好良くなければ、嘲笑されるほど格好悪くもない。

体型も中肉中背で、スポーツも勉強も得意ではないが、苦手でもない。

そんな「ない」が集まった僕が「ある」が集まった人のそばにいるのは、周囲の人間にとって気にくわいならしい。

知り合いと友達。そう分けて呼ぶのもその現れなのだろう。

それでも僕は二人が好きだった。

たとえ周りの人に疎まれようとも……。

両親が僕に対して憐憫のまなざしを向けようとも……。

酒に弱く、缶ビール一本で真っ赤になってからんでくる福部圭介の

事が。そんな僕たちを見て、腰まで伸びる絹のような黒髪を揺らし、  
て、リスみたいにコロコロと笑う宇井野未兔の事が。

そしてわかっていた。

聡い僕にはわかっていた。

秀でた者は互いに引き合い惹かれ合うことに。仲のいい三人組は、  
二人と一人になるだろうことに。周りが思う仲のいい彼氏彼女とオ  
マケ1という形に落ち着く事に。

わかっていたし、望んでいたんだ。

でも、二人はやさしかった。疎ましいぐらいに。

僕たち三人は皆、それぞれに気を使いすぎていた。

## 第5話 瓜生 隆

瓜生隆は言った

「おまえ等の関係気持ち悪いな……」  
憐れみでも嫉妬でもない、僕の心の奥底をのぞくような目をして抑揚もなく。

僕にとってそれは懐かしい経験だった。

久しぶりにオマケではなく、一個人としての視線をぶつけられた気がした。

高校に入学して一年経った日。

その頃には学校にも慣れ、僕の位置付けも確固たるものになっていった。そして僕自身、学校だけでなく対人関係にもいやな意味で慣れてしまっていた。

朝、いつもより少し早めに家を出て学校に向かった。

しかし学校に着くと、もうすでにたくさん生徒でこった返していた。

僕も例にならって掲示板を見に行く。軽い高揚感を含む空気が漂う中、人ごみを軽く押し分けながら前に進む。

その日はクラス替えの日だった。

人ごみの中に未兔の姿を見つけたが、声をかけなかったのは緊張していたからだろう。

張り出された紙が見える位置まできて僕は軽く目をつむる。

「神様、どうか……」

無神論者な僕でも、この時ばかりは敬虔なクリスマスチャン�ながらにいのつた。

そして目を開く。

一組から順に目を通していった。圭介は二組だった。首を何度も何度も上下させ目で名前をおっていく。そして、いい加減に疲れたと思ひ始めた頃、自分のクラスをみつけた。

……はあ……

溜め息をつきながら、踵を返して校舎にむかった。

教室には僕以外に一人の男子生徒しかいなかった。

喧噪が遠くに聞こえた。イベント事では会話にはながさくようだ。

それにまだHRまで時間があまっている。すぐに教室に行くなんて根暗な奴ぐらいで、ほとんどの生徒がまだ外に残っていた。

その男子に声をかけようか迷ったが、黙々と本を読む彼に気を使い、その後ろの席につきつつ伏せになった。窓際最後方の席は、殺人的なくらい日の光が気持ちよく、すぐにまどろみの中に引きずりこまれた。

また同じクラスになった……

僕は一年生の時を思い出だす。

入学式の日、同じクラスになったことを未兎は喜んだ。

一人あぶれた圭介はふてくされ、僕は笑っていた。

まるで心の内の懸念を悟られないように。

女の子は突如として変化する。要因は何であろうとそれは突然にくる。そのトリガーとなったものは何なのか知らないが、それは未兎にも訪れていた。

もともと素材がよかったぶん彼女の変化は顕著だった。

腰まで届く絹のように艶やかな黒髪。

透き通るように白い、雪のような肌。

僕の半分ほどしかないのではないかと思われるほど小さい顔に、その中で際立って大きい瞳。

体型も女性らしい丸みを帯びてきていた。

彼女は幼なじみの僕ですら、はっとするような女性に変貌した。予想どおり、それを普通の高校生がほっておくわけがなかった。

はじめの挨拶でクラスメート全員に覚えられ、数日後には学年全体、さらに数日で学校中に知れ渡った。

そしてプライバシー保護法なんて無論無視なクラスメート達によって、僕、未兎、圭介の関係も誰しもの既知な要項となった。

僕はこの状況を喜んで迎え入れた。

二人の間にいればわかる事実。想い合ってるという事。それなのにくつつかない二人。そんなもどかしい現状を打破できると確信した。二人のためなら道化になることも厭わないつもりだった。

・・・しかし、謀とは往々にして外れるものらしい……………。

結局、変わったものは二人の距離ではなく、うざったい周囲との関係だけだった。

「おまえ、宇井野のと知り合いなんだって」

「星野君って福部君と親しいんでしょ」

何度聞いたかわからない。彼らは壊れたステレオのように同じ言葉を聞いてきた。

そして僕を未兎たちへのパイプとして利用しようとした。

決まってそいつらは、僕から目的のものを引き出すと、連絡が途絶えた。彼らの携帯には、削除された僕のアドレスの代わりに、未兎や圭介のアドが入っているのだろう。

人と付き合うのに吐き気がした。男子も女子も笑い顔を殴りたかった。

人と接する事を避けるスキルだけがどんどん積みあがっていった。

大勢の知り合いの中に、友達と呼べる奴は数えるほどしかいなかった……。

こんなネガティブな事ばかりだと誤解されるかもしれないが、未兎と近くにいることが苦痛な訳じゃない。

それに、今回のクラスには一年の時に仲良くなったシュウや渡会もいたし、なんだかんだいって楽しくやれそうだとも思う。

ただ、不安なのだ。

本性を見せられない人付き合いがこの先も続くことに。僕のことを

友達だと思ってくれる奴らに、本当に僕のことを友達だと思ってるのかと問いただしたくなる自分のことが。時折見せる未兔の儂げな顔が、今の僕のすべてを見透かしているのではないかということが。

大声で、未兔は圭介のものだとすり寄ってくる知り合いたちを突っぱれない自分の不甲斐なさが。不安なのだ……。

頭をたたかれて目が覚めた。

思考にトリップした僕の脳が、一瞬にして現実に戻ってくる。顔を起こすと、そこには頬を膨らませた未兔が立っていた。そういえば、クラスがだんだん騒がしくなってきた。

「なんだよおー。同じクラスなんだから待っていてくれてもよかったじゃない！」

普段落ち着いた雰囲気を纏った彼女の、たまに見せるこういう表情は酷く可愛らしく見える。

そのまま彼女は僕の頬を軽くつねってきた。

「ごひえん」

おもわず情けない声が出た。

「もうっ！」

僕の頬を最後に強くひねった後、しらないと呟いて未兔は女子のかたまりの方に近づいていった。

僕はその姿を見つめ続けた。まるで先程の考えを溶かすように、何かにするように。

一分ほどそうしてじっとしていただろうか。

あまり見つめてても変に思われるから、と思い視線を前に戻すと、さっきの読書男子がこちらを振り向いていた。僕のことをじっと見据えていた。

「なに？」

その瞬間、彼が読んでいた本のタイトルが見えた。

「人の心理を読み解く方法」なにやらきな臭いものだった。

尚も彼は僕の質問を無視しつつ、凝視するのを止めない。

そして、どうしたものと僕が軽く目を泳がせたとき、彼は呟いた。

「おまえ等の関係気持ち悪いな……」

いうまでもないが、それが瓜生隆とのファーストコンタクトだった。

## 第6話 特別な日

笑みが思わずこぼれる。瓜生隆の偉大さに対して。一言でコイツは僕のすべてを溶かしていく。

間違いなく、瓜生は僕にとっての「大」がつく親友なのだろう。

「お前らの関係気持ち悪いな」

聞いた瞬間は何をいつているか意味が分からなかった。

刹那、時が止まった僕にかまわずソイツは続けた。

「思い合ってるのに、まずい方向にしか伝わらない。変な気遣いしか後には残らない。そんな感じかぁ・・・」

真意をはかるよう僕に呟く。

「・・・」

コイツが読んでいた本のタイトルを思い出す。

まさか、ホントに心を読まれたとか!?

背筋に冷や汗がたつた。思わず視線をそらしてしまった。

「・・・なーんてな。そんなビビんなよ。ジョークだって拍子抜けするほど雰囲気が変わった。さっきの重苦しいものから、一気に軽い感じに。」

まじめな顔から、満面の笑顔に。

「お前、もしかして心の中読まれたとか思ったたる。ほらっ」

そう言って、ソイツは僕にむかって読んでいた本を放ってきた。

「なか、読んでみっ」

おもむろに開いてみる。啞然として。

「やーい、騙されてやんの。だいたい、たとえそんな本読んだって人の内面がそう容易くわかるわけねーだろ」

中身はただの漫画だった。しかもラブコメ。「ぶっ!？」

しかも開いたページがちょっとエッチなシーンだったので思わずふいてしまった。ギャップがっぽにはまった。

「やあっーと笑ったかあ。朝から辛気くさい顔ばっかしてるから、笑わないやつかとおもったぜ」

「くくくっ!さすがにこれは笑っちゃうだろ。お前いいギャグセンスしてるよ」

「どういたしましてえ」いきなり教室の隅で笑い出す二人に、まわりの生徒は少し怪訝そうな顔をした。それから、まだ笑いが抜けないう僕にむかってソイツは少し改まって聞いてきた。

「少し聞きたいことがあるんだけど、いいか？」

「別にいいけど、なに？」

息を吐き出し、逡巡するような間をとって、

「お前の名前、星野千秋でいいんだよなあ。それでさっきの子が、確か宇井野……」

「うん、宇井野未兔。あってるよ」

「……やっぱ当たってたのか……って悪い、俺は瓜生っていうんだけど、まあそんな事はどうでもいいか。で、本題だけどさ、ズバリお前らどんな関係なの？」

瓜生のいきなりの言葉に少し驚いた。

先程のやり取りが頭をよぎる。

「お前未兔たちの噂聞いたことないの？」

自分でこんなこと言ってるあたり、やはり、僕の内に動揺があったのだろう。

星野は二人のオマケ。

噂なんて普段最も僕が嫌ってるものなのに……でも、その言葉がすんなりであるほど、瓜生に僕は独特のものを感じていた。

「いや聞いたことはあるんだけど……。なんていうかな、なんかお前から見てるとさあ……。」

「……？」

またもや内考に入る瓜生。僕にはその内側をはかることはできなかつた。「まあいいや……そんなこと俺が気にしても意味ないし……。」  
語尾にいくほど音量が下がっていき、最後の方はもうささやきに近かつた。

結局、それからHRまで瓜生と他愛もない話を続けた。最近、初対面のやつとこんな風に笑いあうことなんてなかつた僕にとってやはり瓜生は異端だつた。これも瓜生の才能かもしれない。それを証拠にその日のうちに、シュウや渡会とも仲良くなつた。圭介や美羽とも然りだつた。

およそ一年間。

その日から今まで重ねた期間。

その間に僕が瓜生についてわかつたことは、ごくわずかだ。バカで変態で、どうしようもなく人というものを咀嚼するのがうまい。僕のつまらない厭世観なんてぶつ飛んでしまっくらしいに。たまにマジメになり、いつもは空気みたいに掴み所がない。変なところでお節介で、めんどくさがりや。

そして、星野千秋恋のキューピット作戦会議の皆勤賞で、唯一僕の

心の中を覗くことができるテレパシーの持ち主。  
……そんなところだろうか。

僕は変わったと思う。

どこがどういふふうにと問われると困るが、確実に。

この男のおかげで。

それくらいこの一年間は今までとはちがっていた。

でも僕は知らない。

この特別な日に瓜生が吐いた最後の言葉を。

「オマケねえ。本当にそうなんだろうか。あの子の目はそう言  
ってるとは思えないんだけどなあ……………」

## 第7話 深淵の底

人間は脆いものだ。

昔、読んだ本に書いてあった。ヒトは五感を駆使することによって世界を感じ、自分のいる場所を知覚できる。いや、むしろできるではなくて、そうしなければできないのである。

ならばもしそのツールを奪われたとしたら、ヒトはどうなってしま  
うのだろうか。

答えは実に簡単。

確かその本にはこう書かれていたとおもっ……

発狂する、と。

暗い、暗い闇。

自分の声の反響音すら何一つ聞こえない静寂。

自分が立っているのか座っているのかすらわからない。

視覚、聴覚、触覚がすべて断絶された空間。限りなく僕の五感  
は奪われている。

思考のみが唯一自分が星野千秋だ、と顯示していた。

まるで深海にいるみたいだ。見えない、聞こえない、触れ  
れない。

正気を取り戻し、周囲を見渡し、僕はある魚を思い起こした。  
ブラインドケープテトラ。

詳しいことはもう覚えてないが、確かそんな名前だった気がする。  
小学校に進級する時にせがんで買ってもらった、海の生き物の図鑑  
にのっていた。深海魚。海の底で暮らす魚。

僕はケープテトラが怖くてたまらなかった。

暗い海の中、そのせいで退化してしまった目。  
虚ろで光がなく、すべてに絶望してしまっているようだった。

でも今ならわかる気がする。ケープテトラは光が見えないんじゃない。  
見る必要がないんだ。

幼い自分には理解し得なかったことが、今ならできる。

普通なら五分と自我が保たないこの空間を、居心地がいいと感じる  
今なら……。

25

ただ、結局のところ、今僕はどういう状態なのだろうか。その疑問  
が頭をよぎる。

なにもない世界。

これが、僕がいるこの場所が、現実だとはおもえない。

しかし、死後の世界かときかれると言葉に詰まってしまふ。

確かに僕は自殺した。

首を吊って死んだはずなんだ。イスから飛び降りたところまでは記  
憶がある。ただし、その後がない。

気がついたら、ここにいた。

どれくらい時間がたったかすらわからないが、きっとこの状態は長  
くは続かないということは直感的にわかる。

始めは散文していた思考が、今となっては状況把握するほど正常化

している。  
絶対このままなはずがない……………はず……………。

思考がまとまり始めて凡そ一時間くらい。僕が疑問を時が解決してくれるだろうとほったらかしにし、自分史を小学校くらいまで遡った頃合い。  
待ち望んだ（？）変化が訪れた。

「あかり……………？」  
前方に、今まで見渡す限り広がっていた漆黒が、一点だけ白んでいた。  
た。

その数瞬後、目映いほどの光が僕を包み込む。その光源は先ほどの方向らしかった。

「っっ！！」

眼球の奥が痛む。

暗闇から急に当てられたことを抜きにしても、それ程強烈な光だった。その光はまるで僕に敵意を持ち襲ってきているようにさえ感じられた。

思わず目を手で押さえ体をくの字に曲げる。

なんだ！なにが起こったんだ！驚きのあまり冷静に分析する余裕もなく、ただあわてる僕。

そんな僕を嘲るように何かが近づいてくる。

いや、ようにではなくソレは完全に僕を見て笑いを浮かべている。そして僕への光を遮るように数メートル手前で仁王立ちして止まる。勿論僕はそんなことに気づかないが、ただ、何かがそばに近づいてきたことだけはわかった。だが、それどころではないのだ。目が痛

くてたまらない。

「おい、その人間。」

だから目が痛いんだって！

話しかけてきたソレに驚くことなく、僕は無視する。

「聞いてるのか？聞こえてるなら返事くらいしろ！」

怒気を孕んでるにしては妙に甲高い声が響く。

僕も誰なのか気になるのだが、如何せん目を開けられる状態ではない。

何とかソレを視認しようと必死に薄目を開けようとする。

「まつ、眩しい・・・し、痛い」

「ああっ、すまない。目を痛めてしまったか。ちょっと待ってくれ」

わざとらしくソレは謝罪をする。顔に笑みを貼り付けながら。

そして何事かブツブツと呟き始めたかと思うと、不思議と目の痛みが弱まっていく。

数秒にして先程の刺すような痛みは嘘のように引いてしまった。

「よしもういいぞ。目を開けてみる」

恐る恐る手をどけ、目を開けていく。僕の眼前にいるソレに期待と不安を込めるよう慎重に。

おそらく、ソイツは僕の疑問にたいする解答を持っているのだと予想をして。

瞳を大きく見開いた。

「 なっ！！ 」

そこにいたのは子供だった。

後光に照らされながら、小さい背を精一杯伸ばして仁王立ちし、いやな笑みを浮かべていた。

「 星野千秋、お前は選ばれたのだ。我にひれ伏して懇願するがよい 」

その子供は高らかにそう言いはなった。

僕は考える人の像も真っ青なくらいに、その場で固まってしまった。

## 第8話 神

“神”という絶対的な存在が実在するかなんてことは、サンタクロースやUFO並みにもどうでもいい話だ。

いると思う奴は、ああっ主よ、なんて曰ってそいつらを崇め奉ればいいし、いないと思う奴は勝手に悪事でもなしてくれればいい。

ホントどうでもいいのだ。

無償で聖夜におもちゃをくれる赤服ジジイや、もしかしたら地球制服をたくらんでいるかもしれない三頭身ヤローを乗せた円盤の方がまだましな話ができるかもしれない。ただ今ここでは、いるという前提のもと僕に一言いわせてくれ。

おい、神！

お前にわざわざ“様”を付けるほど僕は殊勝じゃないんだ。そこは気にすんな。こっちだって頭にきてるのを必死にたえてるんだ。

聞いているんなら僕の願いを叶えろ。

僕の前に出てきて、一発でいいからぶん殴らせろ！！

後光を浴びて仁王立ちする子供。

ある意味ひれ伏したかのようにひざを突き、呆気にとられ固まる少年。もし今、第三者が見ていたら、どんなシュールな構図やねん、

と思わず関西弁でつつこみたくなる状況がしばし繰り広げられた。そんな均衡を破ったのはやはり子供だった。

「おい、何か答える。それともまだ目が痛むのか？」

嘲るような顔をけし、少し心配顔で子供が近づいてきた。それにより、その子供は少女だということがわかった。

そんな彼女を僕はまじまじと観察してみた。年の端はいつて中学生くらい。

日本人がする金髪が黄色にしか見えないくらい見事な黄金の頭髪を、未兎と同じくらいにまで伸ばしている。

少し幼いが、猫のような見ているとぞくぞくしてくるような目と、スラツとして高い鼻梁が特徴的な整いすぎた顔立ち。

漆黒のローブを身にまとい、その全身からは特別なオーラが漲っているように感じられた。

極めつけが、ローブの上から背負っている刀。

意味わかんねえ。

今にしてみると、神というよりも、魔女の方が合っているというのが僕の少女に対しての初めての感想だったと思う。尚も反応のない僕に、彼女はさらにゆっくりと近づいてきた。そして、軽くペチペチと頬を叩いてくる。

「・・・・・・・・」

両者、無言が続く。

見つめ合うこと数秒。

怪訝そうに覗き込んでくる少女に、はっきりいって僕はただ呆然と機能停止するのみ。

全く思考が働かない。

あまりにも予想していた展開とはちがう。

子供でしかもこんな奇妙キテレツな格好をした美少女。RPGならはもつとヒゲを伸ばした物々しい感じのじいちゃんとかがあらわれるところだろ。と、くだらないつつこみを内心でいれることしかできない。

僕のキャパシティーのメーターを振り切るにはこの突拍子のなさは十分だった。

まさに、はあ!？。

しかも自分が神だとかこのがきんちよはのたまってくれている。何か起こるかもと予想していたもののこの状況は何なんだよ……………

……まあ、まあ落ち着け星野千秋。頭を一回リセットするんだ。

僕は再度目をつむり、無想する。

そんな精神集中に取りかかる僕に、その後も少女はつねったり、デコピンしたりと色々と試してきた。

そして彼女が僕の鼻を中指で押してぶたっぱなにしている時、ようやく決心が付いた。

おもむろに少女の腕を掴む。逃げられないように。

少女は少し体をビクツと震えさせたが、逃げることはなかった。

もうなんだっていいじゃないか。この少女は僕が求める“解答”を知っているはずなのだから。

「……教えてくれ……………すべてを。何なのかを。なぜなのかを。どうなるのかを」

おそらく、今まで一度も見せたことがないような顔を、僕はしてい

ただらう。

それは未知への扉を打ち崩すための緊張のせいだった。

冷たい。僕の顔に触れる彼女の手はとても冷たかった。

結局、目の前に現れたその手の持ち主、少女、神、を僕は殴ることはできなかった。

その時も。

最後まで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0558e/>

---

空飛ぶペンギン

2010年10月28日08時29分発行